

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 4 日現在

機関番号：15401

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2014～2017

課題番号：26560416

研究課題名（和文）保育における遊びのリスク・ベネフィットバランスに関する総合的研究

研究課題名（英文）A Comprehensive Study of the Risk-Benefit Balance of Play in Early Childhood Care and Education

研究代表者

杉村 伸一郎 (Sugimura, Shinichiro)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：40235891

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,900,000円

研究成果の概要（和文）：子どもの心身の発達において、リスクのある遊びは必要であると考えられているが、十分に実証されていない。そこで本研究では、保護者と保育者を対象にリスクマネジメント評価尺度を開発し、遊びにおいてリスクの価値を認める程度やリスクの管理を行う程度が、子どもの発達に及ぼす影響を検討した。調査の結果、3歳から6歳の子どもの保護者においては、怪我の回避に関する意識が高いほどスリルのある遊びを制限すること、また、遊びを制限する程度が高いほど子どもの身体能力等が低いこと、などが明らかになった。

研究成果の概要（英文）：Risky play is considered necessary for children's physical and mental development, but this has not been fully demonstrated. Therefore, in this study, we developed a risk-management evaluation scale for parents and nursery teachers and examined the influence of the affirmation of the value of risk in play and the extent to which risk management is carried out in children's development. The results of the survey showed that for parents of children aged 3 to 6 years, the higher their consciousness of injury avoidance, the greater their restrictions on thrilling play, and the greater their restrictions, the lower their children's physical abilities.

研究分野：発達心理学

キーワード：遊び 怪我 リスクマネジメント 保育 養育態度 幼児 発達

1. 研究開始当初の背景

子どもは遊びを通して成長・発達していくと考えられている。しかし、遊びにより怪我や事故が発生し、時には死に至ることもあり、社会的な問題となってきた。そして、欧米に比べて対策が遅れている日本でも、2002年には国土交通省が「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」が作成された。それと並行して、保育現場においてもリスクマネジメントが行われるようになった。具体的には、ヒヤリ・ハット報告による事故リスクの発見と対応などである(上山・倉盛・杉村, 2017)。

しかし、今度は新たな問題が発生した。過度な安全性の追求は、かえって健全な発達を阻害する、と考えられるようになったのである。一般的に、リスクを受容するほど怪我や事故の可能性は高くなる。そこでリスクを無くす方向に向かうのであるが、リスクがゼロというのは、医療などの場合は望ましくても、子どもの成長や発達においては望ましくない。なぜなら、子どもは、ある程度のリスクがある遊びに惹かれ挑戦し、達成感などを感じながら心身の能力を高めていく、と考えられているからである。

この問題は、2011年の日本学術会議の提言「我が国の子どもの成育環境の改善にむけて」でも盛り込まれ、極めて重要な問題として認識されている。我々のグループも、保育所からの要請で、怪我や事故を減らすためのリスクマネジメントに協力してきたが、そこでも同様の問題を感じた。しかし、先進の欧米も含め、ある程度のリスクを受容しないと得ることができない遊びのベネフィットに関する実証的研究はほとんどない。したがって、リスクをできるだけ受容しない保護者や保育者に対して、リスクとベネフィットの適切なバランスを取る必要性を納得してもらうことは非常に困難な状況にある。

2. 研究の目的

そこで本研究では、保育者や保護者の遊びに関するリスク・ベネフィット観と子どもの遊びのベネフィットの関係性を明らかにするとともに、リスク・ベネフィット観の変化や調整の過程を検討する。そして、子育てや保育におけるリスクマネジメントが、怪我や事故の防止だけを目的とするものから、遊びのベネフィットも考慮するものへ変化し、子どもの遊びの価値が向上することを目指す。

具体的な目的は、以下の3点である。(1) 保護者におけるリスク・ベネフィット観と子どもの発達との関係を検討する。具体的には、保護者のリスク受容やベネフィット重視の程度が、子どもの発達のどの側面をどの程度阻害したり促進したりするのかを明らかにする。(2) 保育者におけるリスク・ベネフィット観と子どもの発達との関係を検討する。(3) リスク・ベネフィット観の変化や調整の過程の検討。

3. 研究の方法

(1) 保護者におけるリスク・ベネフィット観と子どもの発達との関係を検討するために、保護者用リスク・ベネフィット尺度作成のための予備調査と、子どもの遊びのベネフィット尺度の作成のための観察と面接を行った。予備調査では、まず、幼児の保護者を対象に、子どもがスリルのある遊びをすることに對する意識や関わり方について自由回答法を実施し、質問項目を作成する資料を収集した。そして、松田他(2009)などの項目も合わせた質問紙を、保護者338名を対象に実施した(有効回答率58.6%)。この結果をもとに、尺度作成し、3歳から6歳の幼児を持つ保護者1,000名(父親と母親、半数ずつ)を対象に、インターネット調査を2回実施した。インターネット調査において、幼児の発達の測定には、手先の器用さや身体能力など11の下位尺度、102項目から成る『東アジアこども発達スケール』(青柳他, 2013)を用いた。

(2) 保育者におけるリスク・ベネフィット観と子どもの発達との関係を検討するために、保護者用のリスク・ベネフィット尺度をベースに、保育者を対象にした自由回答法による検討と、保育者を対象にした評定法による検討を行った。まず、保育者を対象にした自由回答法による検討では、保育者19名に、以下の5つの質問項目に対して自由回答を求めた。① スリルのある遊びをさせるか否かとその理由、② スリルのある遊びを経験する意味、③ 遊具等での定形外の遊び方をする意味、④ スリルのある遊びへの大人の関わり方で気になっていること、⑤ スリルのある遊びに対する保育者と保護者との意識の違い。そして、保育者を対象にした評定法による検討では、私立幼稚園の保育者15名と私立認定こども園の保育者112名、合計127名に、保護者用の項目に自由回答を参考に作成した項目を加えた合計47項目の質問紙を実施した。

(3) リスク・ベネフィット観の変化や調整の過程の検討に関しては、インターネット調査の回答を分析し、子どもの加齢に伴う保護者のリスク・ベネフィット観の変化を検討した。また、幼稚園保護者154名を対象に、子どもの入園前と入園後で、遊びのリスクに対する認識が変容するのかを、その要因とともに調べた。さらに、子どもたちが集団で過ごす保育現場において、いかにしてスリルのある遊びの経験を保障しているのかを、2つの園の保育者にインタビューを実施することにより検討した。

4. 研究成果

(1) 保護者におけるリスク・ベネフィット観と子どもの発達との関係

まず、子どもを対象にした観察と面接では、年長児25名がターザンブランコを行う場面

を6回観察するとともに、観察終了後にインタビューを行い、メタ認知と自己調整学習を合わせた枠組みで整理した。その結果、観察も面接も、メタ認知的知識、メタ認知的制御、情動的制御などに該当する行動や発話があり、枠組みが有効であると考えられた。今後は、この枠組みを使うことで、子どものリスクマネジメント能力の発達差や個人差の検討が可能になる。また、この枠組みは一般性が高いと考えられるので、リスクのある遊びとそれ以外の遊びの比較を行うことも可能で、そうすることにより、リスクのある遊びの特徴が明確になってくるであろう。

次に、保護者338名を対象に実施した質問紙調査において、因子分析を行ったところ、価値と管理の2側面から成る5つの下位尺度が構成され、下位尺度間相関から、怪我の回避に関する意識が高いほど、スリルのある遊びを制限する親のリスク管理が高くなることが明らかになった。

そして、1回目のインターネット調査において、リスク管理尺度の得点と11の発達の下位尺度の得点との月齢を統制した偏相関を算出した結果から、以下のことが示された。保護者のリスク管理と幼児の発達との間で、最も強い関係があったのは、父親と身体能力の間で、父親が、怪我をする可能性のある遊びをさせなかったり、子どもが少しでも怪我をしそうな場合は遊びを制限したりする程度が高いほど、子どもの身体能力が低く、その反対に、父親が、安全に遊べるかどうかは子ども自身に判断させるといった程度が高いほど、子どもの身体能力が高かった。母親に関しては、怪我をする可能性のある遊びをさせなかったりする程度が高いほど、子どものことばの表現や、集団活動、社会的ルールの理解の発達の程度が低かった。

また、2回目のインターネット調査から、以下のことが示された。保護者のスリルのある遊びに対する価値や関わり方は、特に身体能力と関連があり、怪我をさせたくない意識や、遊びを制限することで身体能力が抑制される。また、保護者が子どもに遊びを主体的に取り組ませる場合、子どもの発達の諸側面（身体能力、手先の器用さ、状況判断等）を促進する一方、保護者が遊びを制限する場合、子どもの発達のいくつかの側面（身体能力、ことば理解、状況判断等）が抑制される可能性がある。

(2) 保育者におけるリスク・ベネフィット観と子どもの発達との関係

自由回答法の結果を検討したところ、保育者は、スリルのある遊びを通じて「危険の理解」「身体の発達」「自信」「友達との関わり方」「発想力」等が育つと考えていることが明らかになった。また、保育者と保護者では、スリルのある遊びを通じて得られる能力を意識する程度が異なることが示唆された。また、保育者を対象にした評定法において、因

子分析を行なったところ、幼児の遊びにおけるリスクマネジメント評価尺度として、価値は3因子構造、管理は2因子構造、調整は4因子構造の9つの下位尺度が構成された。また、下位尺度間相関から保育者管理には、リスク管理能力、怪我の回避、不安、各子どもの特性が関連していることが明らかになった。

(3) リスク・ベネフィット観の変化や調整の過程

インターネット調査の回答を分析したところ、保護者によるリスク管理は、加齢とともに得点が低くなり（1回目のみ）、子どもによるリスク管理は、加齢とともに得点が高くなる傾向があった（1回目、2回目）。また、幼稚園入園前後の保護者の認識の変容を検討したところ、幼稚園入園後、保護者がリスクを許容し子ども自身に管理させる方向に変容していること、その要因としては、子どもが実際に遊ぶ姿を見ることが最も影響しており、担任と話をすることや保護者自らが遊び場を体験することなども関係しているようであった。

さらに、保育者のインタビューから、「怪我はどうしても生じる」という意識をもちながら「怪我を防ごうとする対応」をすること、「任せるか、やめさせるか」という二極の対応ではなく、「最大限怪我が回避される環境を整えることで、発達や学習につながる経験をいかに保障できるか」という循環型の捉え方が重要であること、また、保育者間、対子ども、対保護者とのコミュニケーションが必要であること、が示唆された。

(4) まとめと今後の課題

本研究により、以下ようなことが明らかになった。リスクのある遊びの価値を高く評価する保護者ほど遊びの中でのリスク管理を子ども自身に行わせる程度が高い、子どもによるリスク管理の程度は4歳から6歳にかけて高くなる、父親がリスク管理を子ども自身に行わせる程度が高いほど子どもの身体能力が高く、母親が子どもの遊びを管理する程度が高いほど子どもの身体能力や集団活動能力などが低い。怪我や事故は目に見える形で現れるのに対して、遊びのベネフィットは把握しにくいので、発達に及ぼす影響を一部ではあるが数量化できた意義は大きいと考えられる。

しかしながら、保護者や保育者がリスクを伴う外遊びを受け入れるには、基本的なエビデンスがまだ不足している。まずは、保護者や保育者の価値観や態度と子どもがリスクを伴う外遊びを行う頻度ならびに怪我や事故との関係を調べる必要があるだろう。また、保護者や保育者がリスクを伴う外遊びを子どもに行わせるか否か、また、外遊びにおけるリスク管理を、保護者や保育者が行うか、子どもに行わせるか、という意思決定におい

て、保護者や保育者がどのような要因をどの程度考慮しているのかを解明する必要があるだろう。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計3件)

- ① 平田香奈子・杉村伸一郎・倉盛美穂子・上山瑠津子 印刷中 スリルのある遊び経験を保障するための保育環境に関する考察 ―保育現場でのインタビューを通じて― 広島修道大学教職課程年報 修大教職フォーラム, 10, 49-57. 査読無
- ② 上山瑠津子・倉盛美穂子・杉村伸一郎 2017 保育における組織的なリスクマネジメントを通じた環境調整 こども環境学研究, 13, 47-53. 査読有
- ③ 松本信吾・杉村伸一郎・中坪史典・清水寿代・金岡美幸・久原有貴・堀奈美・上山瑠津子 2015 遊びのリスクに対する幼稚園保護者の認識の変容要因 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要, 43, 35-42. <http://doi.org/10.15027/37540> 査読無

[学会発表] (計13件)

- ① 平田香奈子・杉村伸一郎・倉盛美穂子・上山瑠津子 スリルのある遊び経験を保障する保育環境 ―保育者へのインタビューを通じた検討― 日本保育学会第71回大会 宮城学院女子大学 2018年5月13日
- ② 杉村伸一郎 現代の子どもの遊びを考える ―リスクとベネフィットの観点から― 日本保育学会第71回大会 宮城学院女子大学 2018年5月13日
- ③ 杉村伸一郎・平川真・平田香奈子・上山瑠津子・倉盛美穂子 保護者用リスクマネジメント評価尺度の妥当性の検討 日本発達心理学会第29回大会 東北大学 2018年3月23日
- ④ 杉村伸一郎・平川真・倉盛美穂子・上山瑠津子・平田香奈子 スリルのある遊びに対する親のかかわり方と幼児の発達との関係 日本保育学会第70回大会 川崎医療福祉大学 2017年5月20日
- ⑤ 平川真・上山瑠津子・倉盛美穂子・平田香奈子・杉村伸一郎 スリルのある遊びについての価値が遊びの管理に及ぼす影響 日本発達心理学会第28回大会 JMS アステールプラザ (広島) 2017年3月27日
- ⑥ 上山瑠津子・杉村伸一郎・平田香奈子・倉盛美穂子 幼児の遊びにおけるリスクマネジメント評価尺度の作成 (4) ―保

育者を対象にした評定法による検討―日本保育学会第69回大会 東京学芸大学 2016年5月8日

- ⑦ 倉盛美穂子・平田香奈子・杉村伸一郎・上山瑠津子 幼児の遊びにおけるリスクマネジメント評価尺度の作成 (3) ―保育者を対象にした自由回答法による検討― 日本保育学会第69回大会 東京学芸大学 2016年5月8日
- ⑧ 上山瑠津子・平田香奈子・倉盛美穂子・杉村伸一郎 幼児の遊びにおけるリスクマネジメント評価尺度の作成 (2) ―保護者を対象にした評定法による検討― 日本保育学会第68回大会 椋山女学園大学 2015年5月9日
- ⑨ 杉村伸一郎・倉盛美穂子・平田香奈子・上山瑠津子 幼児の遊びにおけるリスクマネジメント評価尺度の作成 (1) ―保護者を対象にした自由回答法による検討― 日本保育学会第68回大会 椋山女学園大学 2015年5月9日
- ⑩ Sugimura, S., & Ueyama, R. (2015). Young Children's Risk Management in Tarzan Swing. Poster presented at the 13th Annual Hawaii International Conference on Education, Honolulu, Hawaii. 2015年1月6日

[その他]

ホームページ等

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/shinsugi/index.html>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉村 伸一郎 (SUGIMURA, Shinichiro)
広島大学・大学院教育学研究科・教授
研究者番号：40235891

(2) 研究分担者

倉盛 美穂子 (KURAMORI, Mihoko)
福山市立大学・教育学部・准教授
研究者番号：90435355

平田 香奈子 (HIRATA, Kanako)
広島修道大学・人文学部・准教授
研究者番号：00435356

(3) 研究協力者

上山 瑠津子 (UEYAMA, Rutsuko)
福山市立大学・教育学部・講師
研究者番号：10804445

平川 真 (HIRAKAWA, Makoto)
広島大学・大学院教育学研究科・助教
研究者番号：50758133